

すずむし

Vol. 2 No. 11

倉敷昆虫同好会

1952年11月

目 次

名敷産蝶類記文塔(1)	広瀬 敏躬	1
訪花ニミについて	松井 傑公	4
南方紀行(4)	黒田 裕一	5
北京の蝶蝶譜考	広瀬 敏躬	8
真夏の狂態	小野 洋	11
私の迷想ケラ <i>Crypsilotalpa africana</i>		
-Palisot de Beauvois の口笛を開くこと		
とビも	松井 傑公	12
あとしほ母		
平地のあさざまだら	船越 俊平	14
ベニシジミの訪花	井手千代子	14
ウラナミニシジミの訪花	井手千代子	14
盛水に飛び出す虫	清水 麗子	14
アカシジミ蝶の寄生バチ	松井 傑公	14
岡山市金山より記録するダイミョウ		
セセリ及スジボリヤマキチヨウ	広瀬 敏躬	15
彦崎にてオオキンカメムシ採る	近藤 光宏	15
本会寄贈品紹介・会員消息		16
新入会員・本会寄贈品目録		17
会則一部変更について・通信・編集後記		18

倉敷産蟬類観察記(1)

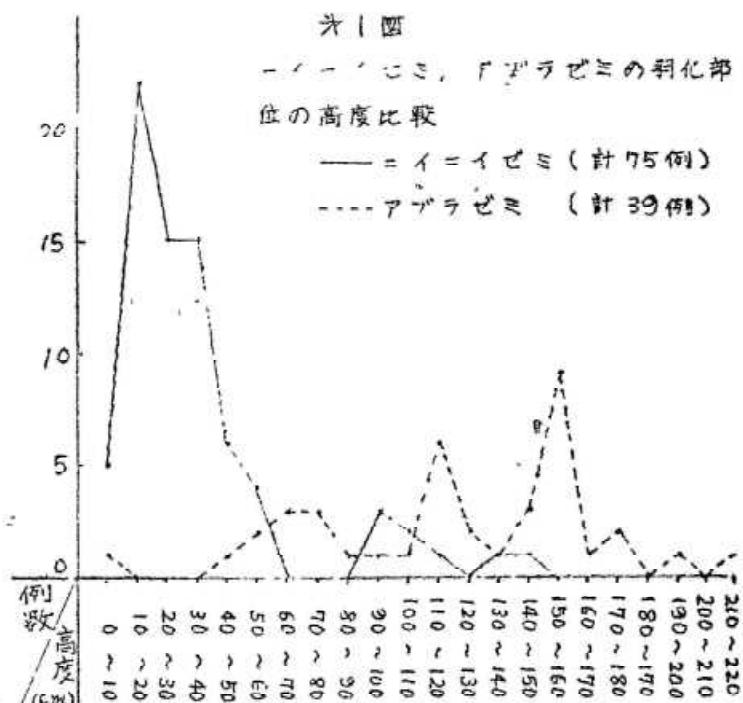
廣瀬義躬

§1 蟬2種の羽化部位の高度調査

蟬の羽化部位（蟬の脱殼の位置）の地上よりの高さは種によって異なることは既に世界通報 12/10 号に記されている。私は今夏く VII ～ VIII, 1952 年主に自宅庭及倉敷市鶴形山等で調査する機会を得たのでここに記して御参考に供したい。種々の事情で自宅庭以外は調査が少ないので各種数も 2, 3 の種に限られ観察例も少くないがその中から比較的多くの例を集めることの出来た、ニイ＝イゼミ、アゲラゼミの 2 種についての調査を記すこととする。調査の方法は巻尺で持って蟬脱殼の位置を地上より測ったものである。両種についての調査を行った結果は第 1 図の如くである。これで比較して見るとわ

かる様にニイニイゼミは羽化部位の位置は低くアゲラゼミは高いと云うことが明瞭である。ニイニイゼミでは 10 ～ 30 cm 位迄が山となって居りアゲラゼミでは 100 ～ 150 cm 位迄が山となって居りその差は非常に大きい。

第 1 図
ニイニイゼミ、アゲラゼミの羽化部位の高度比較



前記虫界通報にはニイニイゼミでは5~50cm、アブラゼミでは1~2m以上に達すると記されている。本調査ではニイニイゼミでは最高140~150 cmであるがアブラゼミでは210~220 cmに達している。加藤正世氏著「昆虫にとって見たま」によればアブラゼミで高いものになると3m以上に達すると云う。これら羽化部位の高度は巢穴附近の環境によって非常に異なることは必然で、これを考慮すべきは勿論であるが他の蝶自体の例えば蝶の強力さと云う様なことが事実問題となるのである。他の種では多くを記録していないのではっきりしたことは云えないが、2~3の例から見るヒゲテシなどでは相当高いのではないかと思われる。ヒキガエルは蝶類の天敵として記録されているが羽化部位が高いと羽化最中に捕食されてしまう場合が多いと考えられる。特にヒキガエルの活動時間と蝶の幼虫が穴を脱出し羽化する時刻とは一致している（いずれも午後）のでそら敵は少くないかである。いずれ来夏は多くの観察を試みたいと思っているので、その上でひんやり穴を試みたいと思っている。本稿では単に記録のみを掲げて置くに留める。この様な調査は極めて容易であると思われる所以諸氏に於いても調査されんことを希望する。

5.2 倉敷を中心とする1952年のクマゼミの終鳴

クマゼミは夏発生する倉敷産蝶類4種の内では最も早く鳴を消すものである。本年は本種の終鳴を行はざり確めたいと思って気をつけていたが2~3記録を得たので少しく渡冬期の状態を記してみだい。先ず観察し得た各地の終鳴日を記すと次の如くである。

岡山市網浜	3/IX A.M 9-10	高瀬(島)
岡山市門田	6/IX P.M 2	高瀬(正)
倉敷市田之上	7/IX A.M 10.30	高瀬(島)(正)
倉敷市新川町及鶴形山	7/IX A.M 10.40	高瀬(島)

以上の如くであるが倉敷市田之上で観察したものは鳴声も甚だ弱く只1頭の記録で終鳴期をしみじみと感じさせたのに打し倉敷市新川町及鶴形山町並では2乃至3頭の力強い鳴声が聞かれ以後連日観察する機会を得ずその様の経過は不明であるが10/IX頃迄鳴声が聞かれたものと推定する。岡山市網浜のものは3/IX迄連日力強い声で鳴いていたが以後全く聞かれなかつた。岡山市門田のP.M 2の記録は本種は午前中に鳴く場

合が多く稀な記録である。本年一回の観察では確かなことは云えなかつて終購期は9月上旬であると云うのは確かであるが九州の中都附近と比較するより1旬程度早いと看文られる。

§3 アグラゼミの異常態相の一例

蝶の態相の異常の例はあまり少くないがここにその一例を記録したので記して参考に供する。

種名性別 アグラゼミ 1♀
 採集日 24/VIII, 1952
 採集地 倉敷市田光上自宅庭火葬來
 カ2図に示す如く右翅に見
 られたもので前翅オ2翅端室
 の横脈(ヒン)の欠如したる
 ものである。



§4 倉敷地方に於ける蝶類の方言整理

当地方に於ける蝶類の方言について先に吉野孝昭氏が本誌 Vol. 1, No. 1 に記され又本誌 Vol. 1, No. 7 別冊「鶴形山の昆虫」に白神鶴氏が特に蝶類について記されて来たのであるがそれぞれ字ちまちなのでこの機会に追加し整理して置きたい。以下出現順に記す。矢印の方向が方言。

ハルゼミ	→	ハルゼミ
ニイニイゼミ	→	コゼミ, テイティ
アグラゼミ	→	マツカワ
ケマゼミ	→	シマー・シャー
ツクリツクボウシ	→	チヨコチヨコイッスン, ホウインツクリツク ホウシゼミ

ミンミニンゼミも倉敷産蝶類の内に入るが極めて稀であるので方言は怪い様である。ニイニイゼミのコゼミは倉敷市でも郊外に当る大森町近畿市街地でテイティと云われているのに対し対照的である。アグラゼミの

4(119)

マツガケノキ各種が公にも多數記載しその類が松の間に酷似していると二
ろいから來ていろのだろうか? 松に近づくとすれば西日本他地方にはこの
様な記録はない様で独特なものである。他の種の方言で奇妙に感ずる
様なものは多くその聲から受けた感じによっている。未だ見落しがある
と思われる所以氏の御教示を願つ次第である。

(後記) 以上4編現在迄筆者がメモしておいたものから選んで記しました
が誤りが多いとしれますが大方の今後の御教導を願つて止みます。

(文献)

anonym, (1946) 蝶の脱殻, 昆界速報(13/14): 3

加藤正世, (1950) 日本の蝶 9, 76 (南條書店刊)
(23/XI. 1952 稿)

詩花三・四について 松井俊公

アゲハ ----- 百日草(キク科), オトコエシ

クロアゲハ --- レンゲ, ニイシ, オニエリ

イヌイジアゲハ ----- 百日草。(ネギ?)

ギデヨウ - イトコエシ

イリロキチヨウ ----- スミレ

アサガホグマラ ----- ハン村(種元がわからぬ)

ヒメカラナミジヤメ --- オトコエシ

ヒメジヤメ ----- クリ

キタテハ ----- クリ, ホギ

ヒオドリジチヨウ ----- ホギ

ミドリヒヨウモン ----- オトコエシ, シオン

クモガタヒヨウモン ----- ウナギリカミ(タデ科), ミオ
ン, ヨメナ

ダイミヨウセセリ ----- ヨメナ

アズバセセリ ----- レンド(ゲンゲ)

イチモンジセセリ ----- フヨウ

以上記憶にあるものを記して見たので種名等の誤りがあるかも知れ
ないが、あれば後程訂正する。 16/X 1952

南方系己行 (4)

黒田祐一

2月28日 (木) 河口オ9日

昼前河口へ少しく並び漁船は8日ぶりに漁を上げる。一舟の高さメートルにとまってピーピヨロロとやっている。驚かもしない。タラップの所ではコーテー・マスター(操舵手)が鉛を先につけた船を投げては「10m」・「10m」・「9m」・「9m」と水深をアリッジへ向って叫んでいる。間もなくアリッジから船首の方へ笛で合図されガテガラと錨があちこちれる。

午後5時にはしけが来ると言つていて出でてくる様子はない。

2月29日 (金) 河口オ10日

昼前何となく左舷の舟が騒々しいので仕事も済ませて出てみると一隻の船が長さ50m位の漁舟を石に抱えて近づいていた。待望のはしけか来たのだ。舟の上には夫々に人夫が50人許り腰をおろしてがやがやと走っている。一段三重甲板の横に他を後甲板の石舷に着け終ると税関吏を先頭に代理たる右・人夫監督等に続いて鍋・釜・野菜・主食物の袋 アンペラを手にした入夫が次々と乗り込んで来る。一種異様な臭気が彼等の顔の面に随に漂う。人夫差はうす汚れたサロンにシャツを着て殆んど裸足である。氣長は一般に高いが栄養状態は良くない。やがて機械の音とともに荷役が始まる。

昼食後荷役の記録区とっているAyadと云う青年名相手に話す。彼の役名はStovedores clarosだそうだ。彼もサロンをまとめていられるので同くペキスタンではレンギー(lungi)と呼び階級によって布の質やサイズが違っているとか、長さ5cm程の糸を巻いて長い糸でくくった見附れの煙草を差し出される。嗅ってみると木の葉くさいばかり。これが大葉煙草なのだ。分解してみると普通の葉の中に煙草の葉の刻んだものもほんの少し入っていて、ニセでは小生の差出したピースがお世辞でなく「アンギニー・ベリー・マチ」であり「ベリー・グッド」であるわけだ。ふと見おろすとほしけの片隅で一人の人夫が手を腹の前で組み、何か呟いては坐り、頭を下にやりつける動作を何度も何度も一心に繰り返している。聖都メッカに向つての午後の祈りなのだ。佛教徒でありながら佛とは供物「おやづ」という關係しかない小生にとってその男の姿は宗教について考え

6 (121)

すに下りられない真跡さがあつた。そこへ税關吏がやって来て検査を要され云う、検査室に連れて行か一巻渡すと今度は目算はないが、D-D-Tはないかと云う。税關吏は乞食と一緒に何でも見たものを呉れと云うからいい加減に与えて珍しくってくれと聞いていたが正にその通りだと思った。日本でも露骨ではないが同じ様なものだと聞きしさすが驚くのである。

荷役の騒々しい響き、掛けの分りぬ叫び声も10時過ぎる迄止んでしまつた。人夫連の寝床は船艤の蓋の上に吊られたキャンバスの中とか、一寸簾の番だ。

3月10日 (日) 河口オ11日

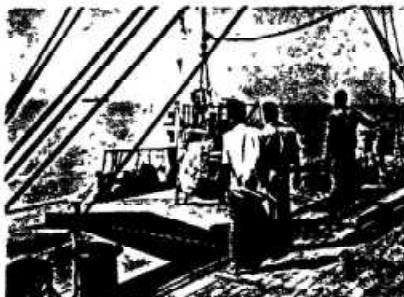
カタン・カタンという音に眠りを破られる。はじめの蓋を叩いているのだ。どうやら人夫の怨聲の合囃らしい。歯をこすり空がち一人又一人とぬじみにキャンバスの褶をまるでキャンバスがらざれてやき取る様に剥け出して来る。ケ時を少し遡っている。

新しいはしけが来るまで仕事がないので人夫は甲板のあちこちにかたまつて土鍋を盛んに何かしゃべっている。トランプをやっている氣のきいたのも居る。こちらでは炊事係りが食事の用意をしている。一日に2回、牛中カレー、ライス附りだそうだ。下の方ではさばさと水の音がするので覗いて見るにはしけの上で一人の男がルンギーを纏ったまま海水を汲んでは頭からかぶっている。そしてルンギーで体をこすっている。お、手拭代用にもなるのか、或者は頭にターバンの襷に巻き、或者は上衣として纏い、或者者は風呂敷に使っていたが今又寺戒としても使われるなどを知り何と便利な着物だろうと感心する。体を洗い終ると頭の上から別の乾いたルンギーをすっぽりと脱り、済めてるのを下へ脱ぎ捨てそれを濯いでいた。こうして昨日から今日にかけて彼等の生態を観察しているのに不思議なことは一人として立小便をしている所を見かけないのである。文化程度は低いが何と公衆衛生の徹底した国民だろうと感心して話すとドクター、何云つんや」と、彼等は女みたいにしゃがんでする事を教えられナンダと思った。

機構が空かない人為的保障の為に入港がのびのびになっている所へ今度は小潮という天然現象が加わって機構が空いても入港は次の大潮を待たねばならないことにあり皆うんざりしてしまう。

3月5日 (水) 河口ガ15日

沖荷役が予定量だけ終ったので、
「又港で会いましょう。ドクターが
寝ている内に帰ります」と昨夜云っ
ていたが、未だ暗い午前4時聞きな
れぬ歌を合唱しながらはしけに乗つ
て全員引き上げて行くのをベットの
中で寒いだろうにと思いながら聞いていた。



沖荷役風景

彼等が引き上げた後何とか気が抜けた様だ。supervisor, store-
keepers, clerks, agents 等といふ職名はついでいるが何れも小
生と余り年の違わない気のいい青年ばかり、それに42歳だというのにア
クロバットの真似などして見せる愛想者のagent 等、すっかり左翼に
なって入れかわり立ちかわり室に遊びに来ていた。日本のこヒを熱心に
聞いたり、回教徒は絶対に妻を他人に見せないのをいいことにして妻の
情意をしたり、訳して呉れと物をねだる文章ばかり手帳に書いて持つ
て来たり、日本軍が南方で密行した子供だましみだいな切手のコレクシ
ョンを見せてくれたり、回教では4人まで正妻が認められくらいの世
界婦夏と並んで写真を見てそれが全部ドクターの奥さんかと眞面目な顔
で聞いて爆笑したり愉快な5日間であった。

3月8日 (土) 河口ガ18日

船内ピンポン大会ありビール・ウイスキー・煙草・サイダー等賞品が
出る。

11日までに船足を22フィートにすれば入港可能と無電あり。水をそれ
までに消費してしまうか、河に流すことにより11日にはどうしても入る
ことに決定する。

3月9日 (日) 河口ガ19日

今日はどうした帽子か藍色をした美しいイトトンボがサロンの入口に
次々飛んでいる。久し振りに甲板に採集に出る。帽子が空くては暑い。
風は全くない。時々大きな黄色をしたシロ蝶が通り過ぎる。サボテンの
未だ熟にならない若葉より蝶・蝶の類を採集する。

8 (123)

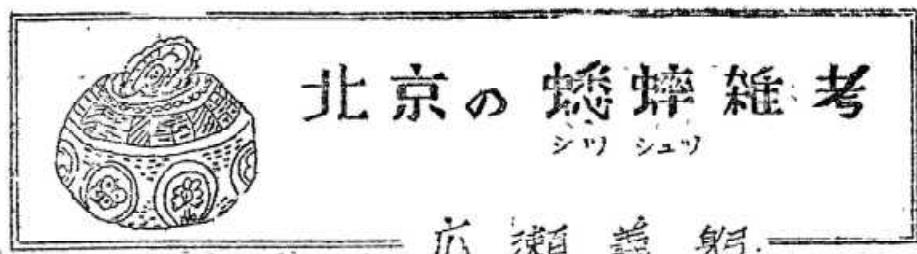
海水の物にここ久しく漏った海水のバスに開口していくが、今漁は久し振りに真水の場の漁ちた西洋漁船に体を伸す。もう船一日すれば入港だ。よくも待たされたものだ。出ては入り吾々の後から来た船がやはり10隻近く仲待ちしている。長い時は一月以上待たざるをうだがもっとうまいこと行かないものかしら。

電燈に乗っていたセゼリ蝶・トンボ カメムシなど採集する。

3月10日 (月) 河口オ20日

6時半起床、顔を洗っている所へ君がカメムシを持って来て與れる。7時半朝食のドラが鳴る。サロンに掛けると中型のトンボが一匹籠箱で抑えてあつた。食後甲板を採集して歩く。ついよいそ明日はねと顔も明るい。

(続く)



古く紀元前3000年頃黄河の中、下流域に起った中国文化は以後何千年もといふ間、専制のわくの中に止って本質的には何の変化もなかつた。そこには新規な景物で人々はひだすら旧慣と俗風に縛られなければならず何事にも堅硬的であったが、又それだけ古い文化の面影が今らかの形で多く保存されていた。黄河の流域の多くの諸都市の中でも北京は中国の古く文明が確立した成都であると云われる。幾多の治乱興亡による変遷に耐え常に政治文化の中心地として激しい社会的変化を避けた北京、異った民族、社会が融合し複雑な歴史を持つ北京、そこに住む純粹の北京人の好みは他地方の者の窺知し難い所があり、又あまりにも綺麗でさみしゃであると云われている。こゝに私ほつたない聲をとってその虫に関する風俗の一断片を御伝えしたいと思う。

蟋蟀と書いて音ではシリシリと読む。試みに漢和辞典をひもといて見ると「とおろぎ、さりざりす」とあるが説明には「長さ六七分の小虫。

頭間又族下瓦石の間に棲む。全長類黒色で薄い翅を翼、秋の頃翅と翅とをすりあわせて音を出す。促織。」とありこれを見ると明らかに「さりざりす」ではなくて「こおろぎ」である。「促織(ソクショリ)」と云うのもこおろぎの一名で「冬が来る歳は庭ありを急げば鳴く虫の名」とあると云う。日本でも古い歌に詠んださりざりすは「こおろぎ」であると云うから「さりざりす」の意味は非常に薄れたものであると云ふと思ふ。さて冒頭から指の筋がそれてしまつたが、ここに紹介するのは北京の風俗 蝶々 四季、事物年譜を隨筆風に巧みに描いた「辰未雜記⁽¹⁾」の中の「蝶々」と云う一節である。先ず参考互に原文を示すと――「京師有草虫。状如蝶々。肥大而青生於夏秋間。声唧唧甚聒耳。京師人多籠以捕之。每看十銭金一頭。其籠以小葫蘆。去其上或扇一之。四圍麻花繩以通氣。繩細工絕。價有貴百金者。八旗滿洲婦人。多有空其籠以納一之。使其声相應若行肆賣糸者。然俗名此虫為鳴鳩。按鳩乃姪屬非草虫也。」この大体の意味を述べると、――北京にこおろぎの様で肥えて青く夏の末から秋の始めにかけて発生する草虫かいる。その鳴き声は唧々⁽²⁾（ソクソク）としてやかましい。北京の人は籠に入れて帝につるして持つているがよいものになるべく一匹で十銭円もする。その籠は小さいひょうたんを用いてその上部を切り取って作る。周囲には花や蟲を飾り空気を流通させる所にし、精密に細工が施くこの上もなく玲瓏に出来ていて、高いものになる比百円余りもする。八旗滿洲の婦人籠はその籠底を空にしてその虫を入れ、虫の鳴き声と靴の音とがあにかち支那古代の名音樂の唐箏（ミカ）や采荷（サイセイ）の曲を聞くかの様に音楽的に調和させねとした。しかし普通、この虫のことを鳴鳩（カクカク）と云つていろが禰べて見ると唄と云うのは亞の一種であるから草虫ではないことに至る。一と云うのであるがこれを読んでみてもすぐにこの虫が実際何という名を持つ虫であるか、この方面には全然暗い私とてわからぬのであるが蛭の類であると云うのは甚々疑問があろ様である。渤海本には「肥大にして青く」というところから「さりざりす」では空からうかと推定しているがこれだけではどうもほっきりしたことほわからぬ様と思う。中國人が入骨物に鳴く虫を飼うことはよく知られていて佐々木悌三氏⁽⁴⁾によれば中国人はこおろぎを競技する目的で象牙、螺殻等に雕刻をほどこした葫蘆（ボウロ）と云う寸分が嵌つた入骨に入れ封入して

10 (125)

これを常に手に持つて居りこおろぎは適度の喘息なずえ。3年も生きて居るものがあるといふ。葫蘆といふのは字は同じであるが前文では（コロ）とおりひょうたん　ふくべの意であるが佐々木氏の葫蘆といふのは多少違う物の様である。しかしこれによつて「こおろぎ」と多少関係があるのではないかとも考えられ。これは無論に李が2・3の中国人とこおろぎに関するものを読んで見るに中国人は日本人と異つて「こおろぎ」等を愛し飼育するのはその鳴き声を楽しむ為ではないことが多く翻訳さすのがその主目的であると云う。それ故に民族の嗜好性の差異と云う大きな問題に迄発展して行くものであつたが大町文衛博士は最近日本に於てもこおろぎの翻訳が2・3ヵ所で子供達の間で行われていた事実を記された様である。⁽⁵⁾ とにかく虫や蝶の類を葫蘿に入れてかくと云うのは奇妙な話であるが又そこで前述した北京人の嗜好の済美と綺麗さ、さやしさとが見出されはしないだろうか。夏の北京はえんじゅと柳とにそれでうつそと拂りその間をねじの花が薄赤くいろいろと空には白鳥の群れが舞き表ると云う。左右に宮殿や廊縁が整然とそびえ立つ並木道を夕方笑しく散った貴婦人が散歩する。その足下からもれる音は街の音と同じだやみの中に溶け込んで行く。そこには久しい花麗な官庭生活を中心となって翻訳され我がわれた嗜好の済美が感じられる。ここに我々は古雅な美しい所北京が時代と民族をも越えて風物と人間の生活が一つにとげあつた姿として目に映るのである。

後記　筆はキヨリのない粗雑な文章となってしまったがこれでひとまず筆をおく。この虫は何であろうか。コオロギ上科のものには間違いないと思う。私にはよくわからない虫が多いのでどうか御教示願えれば幸甚である。　(17/XI 1957 稲)

参考文献

- 1) 作者不明。清朝中明刀作らしい。
- 2) 虫の鳴き声を形容してこの様に云う。
- 3) 清の太祖時代に始めた軍隊制度で後この部隊は貴族化した。
- 4) 佐々木悌三(1940):支那人とこおろぎ　昆蟲界8(76):407-412
- 5) 大町文衛(1952):蝶蜂を専ねて

眞夏の狂熊



小野洋

2本の細い竹の棒はそろそろと怪しく動いて行く、右に左にゆっくり、小わふわと移動する。アリ今度は前へ、前に向って進んで来る。だんだん速くなって来た。並に目的物に到達したのか? そうらしい。歌番

にふるえながらせのしくしかも不思議な位慎重に、2つの棒が何物かを抉んでつまみ上げた。薄明りに弄い物が空中で脚をばたばたやっている等が。と見る間に外へ、もっと明るい方へそのままぐんぐん去って行く。暫くして又入って来た。「そこらあたりにちらかって、べつとりくっ着いている紙を裏返したり動かしたり」軽妙に悪いものを追う。つまみあげる度に外でどっと歌声があがる。同じことが数回繰返された。一体何が始ったのだ? こゝに居ては分らないもつと棒のやつて来る方向に近寄って見よう。又伸びて来た構。それは人の程でしつかりつかまれ動かされている。腕が見て來た。四人居る、手に手に棒をもって。又續えられて既に黒いものが一人の持っているカンザメの空カンラしいものに投げ込まれた。中でもざもざとうごのきまわって脱出を試みているのはなんとベッコウヒラタシデムシではないか。更にずっと視野を広めて見よう、やがてはっきりと見て來た。静かな入里離れたさびしい山中の寺院。その裏側にあるほんとに狭い所、そこなのだ。横たわっている腐れた木々、ぼうぼうと伸びた草、その傍の壁にはっかりあいた四角空口、それらがえも云われぬ雰囲気をかもし出してたり、あたりにふんぶんたる臭気が立ちこめている。云わざとも知れた便所の吸取口なのである。異常に大き空口、臺から便器までやに高くって割に内部も明るい。シデムシは今日までそこ(便器)で周期的にやってくる軽い環境の異常の時の外はとても楽しい生活を営んで來たらしい。だが今度大事件が起っている。彼等の仲間が目前を撲滅作に覆えられて行くのだ。もぐれど

12(127)

も全く廻置平しか？。四人の人達は今朝別々に用をだして来て素晴らしい虫の世界を観見し採集を終矣だ。そこで震華後、各自にその結果をきり出したがたちビコロに意見一致、二つに至ったものらしい。四人はその仕事に懸命で盛んに汲取口から中へ棒を入れてかさまれす。腰はらんぐんと走っている様にさえ思われる。平んだる狂態だ。ヒ突然上方にあたってミシミシ音が響いて来た。四人は顔色を変えてワーッヒばかりに彼方に逃げて行く。そこえ上から何か声がかゝった。小さい一人が「イヤーなに、虫を探っているのですよ。ではごゆっくり！」と云つて立ってしまった。全くしまげだそのである。どうやら御住職が用をだして来られたらしい。御住職は昆虫采集にはすくなき御理解のある方だがこれには御苦笑の神はなかったであろう。やがて去った人々が「もう終つた」「出だ出だ」と口々に叫ひながら飛び現われた。まさに狂人ざたである。こうしてそこに居たシギムシ、エンマムシの大半は捕獲されてしまった。四人は破顔微笑しながら獲物をもって炊事場に現われ。御住職が向うのイロリにかけてあつたやかんを持ち出して来た。あれれや、せだむいたやかんの口からは熱湯が流れ出し、空カンの中にうごめく汚物にまぶれた黒い塊の上に泡の如くに降りそそいだのである。ヒグラシ鳴く山寺での或日。ほんの僅かの間の出来事であった。もう終つたのである。もう戦争に起りはしない。

三十分ばかり後人々は平よく分けた獲物を納めた管瓶をポケットにじのばせ、リュックを背負って手にした網をふりすわしながらいかにも嬉しげに下山していたのである。

(以上は本年5月那岐山に於ける筆者を混えたシデムシ採集の行動記とある。)

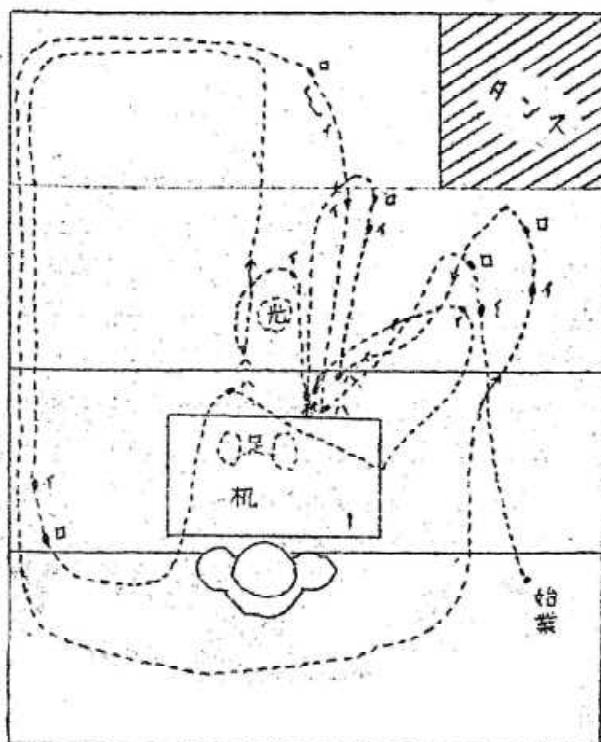


私の迷想 ケラ *Cryphalota africana* Palisot de Beauvois の口笛を聞くことども

松井俊公

九月二十五日試験日も日近かになつてゐるので机にカジリついているヒ。一頭のケラが電線に飛来して來た。何となく放り出したらまたやつて來

て、たたみの上をはいまわっているので、何気なく小さく口笛を吹いた（私はこんなくせがある）。音は低くヒゲラシの鳴くような聲音を出した。少し歩行がにぶくなってきて10m程行って止つたが、さかんに触角を振っている。又頭部（前脚および頭部）を少しこちらに曲げている。



しむようである。又追う。(イ)、(ロ)、(ハ)をくり返す。少し早めに吹くと(イ)で廻って(ハ)に進した。そして二度目の大まわりを始めた。(イ)から吹き始めると歩行がにぶくなつて(ロ)に至り(ロ)から私の横を廻つて(ハ)、(ニ)に進す。これから(イ)に行き(ここで始める)最後の(ハ)、(ニ)にもどつた。

これ以後はやめたのでわからない。がしかしケラは口笛を開くし聽覚による者の色別、例えは誰が雌を呼ぶ鳴音等、と考えることは私の名(述)想で人間の頭を構成した大人風のことだらうか。こんな風な附近かなどころに大きなか(?)問題があるのであるまいか。

る。更に続けると体をこちらに向けて、フルスピード(さかんに足を動かしてい)るから)で歩いて来た。そこで私の足を動かして反対の方に追いやつた。又同じ
b.あたりのところへきてさばくと再び吹くと止つたがすぐ室の端をまわつて前のうしろ
a.から前に出た。(イ)から吹き始めて(ロ)で止つて方向を変えて(ハ)の所まで盛んにやって来る。
こんどは少し申し廻

あとしげみ

平地のあさぎまだら

兜郡福田町東泉のオ一福田小学校講義室内であさぎまだら早咲浦文ました。10月18日の朝10時頃花瓶の花を訪ずれていますを発見して斯くて見るとまだ新鮮な個体でした。花瓶にあつた花は何だったかうつせりして記憶して居ません。この学校は田に囲まれ山地とはトコトコ以上離れています。その山も松の多い植生の貧弱な所がほとんどです。こゝにこの個体がどういつ経緯で飛来したかよくわからりませんが珍らしいことだろうと思ひますので報告いたします。もつとも新昆蟲 Vol. 4, NO. 9臨時増刊号によれば都合に飛來して訪花することもよくあるヒイウことですが。(F生)

ベニシジミの訪花

オオフタバムグラ おかね科
浅口郡金光町
ヨメナ きく科

金光町及び玉島市

岡倉天野村太朗著“蝶の生活”に記載されていませんでしたので報告いたします。訪花の度合が非常に多く私がベニシジミの訪花を見

たうちほとんどがこれらの花でした。
(井手千代子)

ウラナミシジミの訪花

コウヤボウギ きく科
岡山市半田山 11月7日
アキノキリンソウ きく科
岡山市半田山 11月7日
彼輩が急に休講になったので秋にうかれて大學裏の半田山へ登ったところ途中で上の二つを認めました。これも“蝶の生活”に記載されていなかったので報告いたします。

(井手千代子)

塩水にちびみす虫

11/1 ('52) 岡太理学部松本助教授の下鳴鷺湾の網豆コのお手伝に行うて特有びだ舟の下にちびみすむし *Micronecta sedula* Hornbach が多數いた。これは普通塩水にいるのに鳴鷺湾の如き塩水(松本先生によれば 1:0%)にいるのは面白いのでお知らせする。幸おビの程度まで生存できるかの実験結果は追ってお知らせする。

(塩水慶子)

アカシジミ虫角の寄生バチ

1952年6月15日タコラ山に於て採集せるアカシジミの頭が黒化しながら足が厚が羽化しなかつた。ところが暫くすると小さな穴があ

あとしがみ

けてキアシブトゴバチ *Brachymena obscurata* Walker が羽化した。
頭の同定は林慶氏にして戴いた。

(松井俊公)

岡山市金山より記録する ダイミョウセセリ及スジボソ ヤマキチヨウ

筆者は去る18/VII、'52岡山市(旧牧石村)金山(標高500m)に採集を試みた際、すべて頂上附近でダイミョウセセリ1合及スジボソヤマキチヨウ2合を記録し得た。兩種共山地では普通なものであるが倉敷では記録がなく又最も記録される可能性の強いものである。水野弘道君は本誌2巻4号にダイミョウセセリが東洋に於て記録された旨報告されたが筆者も26-VII-1950同地に於て本種1頭を確実に目撃した記録をもつ。又本種は倉敷以南の天城付近に記録された由小野洋氏から聞いていふが現在の所倉東～金山の北緯34°45'以南の地には分布していない様である。スジボソヤマキチヨウも東洋に採集記録がある由、聞いて居り水野君の目撃記録(不確定本誌 Vol. 2, No. 4)もあるが前項に比してなほ稀なものである。なお採集されたスジボソヤマキチヨウは

前脚端の突出が並後山種のものに比べて著しく弱くその姿はヤマギチヨウに酷似している。両種共本種を保存。(10-VII-1952構)
〔註記〕本稿を脱稿後の22/VIII再び
金出にてノットモ根リダイミョウセ
セリ3頭採集2頭確認1頭目撃し
本種が金山に於ては普通に棲む
ことを知った。メスシボソヤマキ
チヨウ2合採集1♀確認した。前
種は頂上附近(500m)から山腹
附近(300m)迄の低地に於ても見
られるのに対し後種は頂上附近に
のみその姿を見ることが出来た。

(22-VIII) (広瀬義躬)

彦崎にてオオキンカメムシ 採る

1952.10.19同好の人々と暗夜討
查した尾崎郡彦崎より入山し柳内
をへて由加にいたる新路に向って
行く途中、壁にぶらさがっている
本種(*Eucorysses grandis* Thunberg)
を採ることが出来た。この日か
なり珍らしく倉敷では鶴形山、羽
嵩山等で各々1個体採りれている
様である。彦崎ではこの記録が初
めてであろう。

(近藤光宏)

16(130)

本会寄贈誌紹介

INSECT MAGAZINE No. 12, 15, 16, 17 及 I.M.号外

(1952) 少年昆虫会発行

中学生、高校生のみのストの報告も多い。かくてマズリ板2台購入の
昆虫同好会誌。従って12号は採集案内符集号
内容もさして取扱っている。16号は夏山案内号で
程度のものがないが15号
各地の採集案内を多数
の如藤明氏の「モンキ
チヨウの越冬帳(その
2)」——幼虫の残
す食痕——は先に同氏
によって新昆虫Y1.4.No.
13に發表の続編である
最後の1951～1952年の
記録を記し、試冬中の幼
虫が冬モロコシ食跡に
成長していることを示
す成長経過表をも附し
力編。他は大部分採集
記及採集案内があるが
寄付を募り成功している。
御一考を煩したい
毎号4～12頁との号を
見ても少年諸君が愉快
に楽しくやっていると
いうことがよくわかる。
「すずむし」とは全然
傾向を異にする。(發
行所東京都大田区新井
宿3, 1362西川方)
希望の方との面接員の
方へ御伝文下され。空
いている限りいつでも
御覧に入れます。

(文責Y.H.)

会員消息

山川東平氏

平成10月上旬、御結婚されました。今後高
名東平と名のられます。住所も同時に西山市門
田御成町1174に変更。君敷市西小学校へは時
山から通勤されます。

能勢登美子さん

何かあれば原稿をどの
依頼に対してもお母様か
ら次のよみな便りが到
着しました。松茸の香りも高い頃と
併りました。会員の皆

よいですかお問い合わせ
す。先ほ日すゞむした
月号をお送り下さいま
して有難う存じました。
会員の香様ほかなが御
熱心に御研究が出来て
居りまことによろこば

しい事と存じ上げます ものゝ中に入れて日光 どちらが作るのか分つ
 何が原稿をどの事で今 に当てると聽のために ていません。此のから
 年の夏休みは妹が孫か 話が熱して来たら死ん は大変藝術的に出来て
 つたためその方の治療 でしまいます。のうじ いて圓のようです。大
 の爲したいと思った事 ゆうは羅刹が好さらし 变小さいものですが見
 も出来ず残念でした。 く他の他に物の使 異 ていろビ布にふ
 衣類や春服について私 つてあるものをよく 離の色 って色々のが出
 連を面らせている「の く食っています。 布には少しひだり
 うじゅう」と「毛虫」 お戯物でなくとも 一ビ思ってみまし
 とについて調べてみま 織物でも新しいも た。思うことを
 した。その結果防虫剤 のなどには箱がほ お戯の色で面白
 も室外効果の無い草が いっているからで 一ビ思ってみまし
 わかりました。それか しょう。食ってい た。思うことを
 ら8月末の直射日光に るのが在りました。「 お戯しを願い度いビ
 当ると毛虫の方は30秒 蚊虫」は名の如く毛戯 存じます。手ごとに亂
 で死んでしまいました。 物刃刃の子うです そ 事にて安らいだしまし
 「のうじゅう」の方は 日光のあたらぬ横にげ れから丁度刃の虫のよ た。益美子に代って書
 通りますが死ぬと云う うに布で食ってからを かせていただきました。
 ことはなむか存りま 作っているのがいります 皆様へまろしく
 せん。コップや金属の じゅう」か「毛虫」か 10月5日
 能智房子



新 入 会 員

51 小野津義

淡路郡船橋町

(住所)

岡山大学教育学部3年

(学校)

本会寄贈会報-目録

現在迄に本会宛てに送付された同好会報を下に掲げます。これら会報の借し出しについて具体的な規約を定めたいと思います。御意見お寄せ下さい。

昆虫石見No.2(1951), INSECT-MAGAZINE No.12, 15, 16, 17及 I·M 号外(1952), 昆蟲誌 24, 25号(1952) 大和郡山草木虫魚の会会報 Vol. V, Nos. 27-28 (1952)

18/132)

会則一部変更について

本会専門所は倉敷市新川町倉敷西小字花屋町教室に置かれていますが、色々と都合の悪いことがありますので商谷稟平氏からの事務所設置について申し出がありました。提出された問題については早速会合を開き会員全員で協議すべきところですが緊急を要しますので役員のみで11月23日近藤氏宅にて慎重に協議した結果、今後事務所は倉敷市住吉町大原農業研究所内に置くこととなりました。どうか御了承下さるようお願い致します。

又同席上、会則第4条D項(機関紙)の改定を議論されましたが理由、即ち予算が不足である。“すすむし”の貢物増加により原稿収容力を高める。各地で同好会誌が創立している折から一つの同好会で一種の機関紙を出すことは益々混亂を助長するばかりである。なので役員間では消去が決議されましたがこれほど皆様の御意見も聞いて後日はっきり消去するか否か決めたいと思います。御意見お寄せ下さい。（編集部）

すすむし 第2巻第11号

昭和21年11月30日 印刷

昭和21年11月30日 発行

通 信

石井保先生から

前略「すすむし」第2巻第1-9号御恩送に与り厚く御礼申上げます面白く有意義に拜見致しました承く大切に保存し参考にさせて頂きます尚9号青インキは淡く序るので今後カ7号のようにインクは黒くなさった方がいいのではないかと存じます一筆御礼の申上げます 草々 9月30日

江崎悌三先生から

謹啓先日は貴重すすむし第2巻第1-9号の3冊をお送り下されあり承たく御厚くお礼申上ます。いつも珍らしくお世話の記録を以が勤めに勤めと存じます。幸いにこのお礼後札お許し下さい取急ぎ右お詞まで 10月22日

編 集 後 記

冬の季節風と共に二二二三四月につきり和くなりました。寒咲ストモ温咲ストヒセ留平いは相豆よセに新規から寄せられた沢山の原稿を早く印刷せねばと午夜から朝一で一晩がかりを切らしては印刷をやりと10日余りがつてやっと仕上りましたが毎度のことながら印刷の不出来のにはエウクツに困っていました。読みやすらいでしようが御幸運下ござい黒田拓一氏からは立派な写真類を数点本名に添付下さいました。厚く御礼申上げます。次第に選んだ原稿を沢山取ります。多くの方々に紙上で活躍して顶く機会を手にした

編集及び印刷 青野秀昭

発行所 倉敷市住吉町大原農業研究所内

倉敷昆虫同好会